

歌

集

車
椅子

車椅子

山野井昌子著

車椅子会出版

歌集 車椅子 頒価 一五〇円

昭和四十五年十二月十日印刷
昭和四十六年十月三日再版

著者 山野井昌子

与野市大戸八七五

発行所 車椅子会

代表者 荒井 殉

浦和市道祖土戸崎一八二七

印刷所 古内印刷有限会社

序

聖アントニオ大神学校院長 中 田 藤 太 郎

人の世は苦惱にみちている。

そのなかを行く人の魂の美しさと、逞しさに私は驚く。

肢体のそろって、なんの不自由も感じない者の中に、とうてい見ることでできない不思議な力が、そこにはもえている。人間の生への純粹な執念ともいうものであろうか？

生後数ヶ月で発病し、小児麻痺の後遺症と三十七年間も闘病し、畳の上で寝たっきりで、今尚、闘病生活を続けている一人の女性がいる。

鉛筆一本握れず、その口に生命の糧すら運ぶことの出来ない身でありながら、本の頁を口でめくり、詩を詠み、人生のジャングルを巧みにかき分けて、前へ前へと前進していくのだ。彼女の生命は、きのうも、きょうも永遠の丘に向って燃え、星の如く輝きを消さない。わき目もふらず、ひたすらに、我が道を行く、かと思うと、数知れぬ多くの不自由な人々の群に向って、その目は輝き、ヤーホーと叫ぶ。実に澄みきった声で仲間たち呼びかける。

峠は近い！ 頑張れ！

運命の十字架をになって森のようにたむろし、寄り添うている身障者の厚い群に、その声は木霊して私の胸にかえってくる。

三十七年の病歴に対して、他人はみじめだ……というが、本人の山野井昌子さんは、「私の生甲斐」という。

わが身だけの幸福というものはあり得ない。他人の幸福のために生きる人生こそ、本当の人生だ、と彼女ははじめての「詩集」を出した。

この美しい人生詩は、病める現代社会のジャングルの空高く、人々の心を照らす星となるにちがいない。

一九七〇、十一、八、
瀬田の森にて

車椅子によせて

松井真資

☆歌集「車椅子」におさめられた短歌は一五六首ある。うち二十首をここに紹介させていただきます。私なりの感想を書きとめておきたい。

※

- 一、背丈のみ大人になれどわが手足赤子の日より未だ動かず
- 二、今日も床に伏しつつ麻痺の身を起し痛む唇をもて辞書を引く
- 三、手足萎へて一度と踏まぬ土のうへを歩み居たりき夜明けの夢に
- 四、母はそとピーマンを乗せぬ野菜の感触を知りたがるわが萎へし手に
- 五、今日も師の旅より賜ひし絵の葉書高原の風の病む身をつつむ
- 六、心にて十字切りつつ手萎へ吾れ皐月の空に祈りささぐる
- 七、蚊の一つ吸うままに居り何事も呼べよと母は厨へ立ちし
- 八、血縁の男の子の他に触れもせずわが麻痺の手のかぼそく白し
- 九、大浦の天主堂へと石坂を今宵テレビは病む身いざなふ

- 十、説明をし給ふ声の爽やかに何時かスライドの中に旅する
- 十一、礼をのべわが落す涙拭き給ひ君は帰りの仕度はじめぬ
- 十二、鉛筆も持てぬ病む身を悔みて泣きし夢なりき昼寝より覚め
- 十三、雨戸打つ風音いたく読みふける聖テレジアの情熱慾しき
- 十四、主はわれに恋も許さず身障の重き十字架に清められつつ
- 十五、地上にて花よめとなる倅を思いし日あり今は主を恋ふ^{しゅ}
- 十六、譬へなき思い極まり洗礼の水は冷たく額^{ぬか}にしたたる
- 十七、十字架の道行の主のみ姿に打たれつ伏しつ引きおこされつ
- 十八、カルワリオの丘に登らすイエズスよ地上の人の原罪重く
- 十九、流れる足の御血^{おん}に口づけて謝すれば甘く渴き癒えゆく
- 二十、ひたすらに午後の祈りを捧げゐてあやなく垂るる涙芳^{かんば}し

※

これら任意のぬき書きの、わずかな二十首を読むだけでも作者の生活やその心情は、かな

り重く読者の胸にしみ入るゝとだろう。

私はまずこれらの歌に「強さ」を読む。あるいは「しつかりしたもの」があるのにおどろく、それはおそらく作歌技術の問題だといえよう。作歌のこゝろえをのみこんだ歌いぶりか、そのしらべのなかに溶けて、強さを感じさせるのだろう。だが、何よりもその強さは、作者の素直な歌いぶりがほとばしり出ているからにほかならない。

それをおぎなつてあまりあるのは、作者の胸にたぎる熱情であり、内部のゆたかさである。作者が床に伏したまゝすごさねばならなかったその年月、その生活は、歩くことのできる人々の生活をつきぬけて行ったといえるだろう。五体満足な人々が生活に倦んで行き、「私の疲れはてた心に豊富さをお与えください、なえている、すべての心に豊さを。イエレミア 三二・二五」といった旧約聖書の予言者の言葉にさえ耳を澄ませぬまゝに、内部のゆたかさをおき去りにしてマスコミ現象にゆれ動かされることのみになりおゝせてゆく時にも、作者は床に伏しつつ内部のゆたかさ、心の草原の輝きを育てていたのであった。

私は最初「強さ」を読んだが、次にたとえようのないせつなさに胸がしめつけられ、そしてこれらの歌をささえる熱のはげしさに私の頭脳がまぶされるように思い、なお読み進むうち、あたたかさに溶けてゆく私自身の心をのぞきこみ、愛とは何かを改めて自分自身に問ひ、そして最後に歌のなから祈りがあふれてくるのを受け取ったのであった。私は信者ではない。神を信じきれないでいながら、神の影を求めているあわれなる者にすぎない。したがって私の心身は祈りを体得できない。しかし作者の愛と祈りを、私はこれらの歌の肉体、歌

の眞実をのみこむことによって、いくぶんかは理解できたと思ったのだ。

最初の「背丈のみ大人になりし」は、まさに直線でつづられたものであり、ひと息で書ききれていて、歌そのものがそっくり立つような感じを受けるだろう。二首めは「痛む唇をもて辞書を引く」のだが、作者は今、この唇で頁をめくらねばならぬいらだちを通りぬけて、唇の先から、言葉のひとつひとつを、そのしらべを、発掘しているといわなければならぬ。三首めの、土の上を歩く夜明けの夢のはげしいせつなさは、読む者の身をふるわせずにはおかないだろう。

三十数年を歩けないまゝにすごしてきた作者の足が夜明けの夢のなかで歩くのである。その土の感触、この不安と恍惚を、歩くことのできる者はもう一度たしかめてみたくなる歌である。四首めは、野菜の感触を知りたがる作者の萎へた手に、母がそっとピーマンを置くのである。何というあたたかさと、つきせぬせつなさが匂うことだろう。五首めの歌は美しい。歌の先生からもらった絵葉書きには高原の写真か絵が、刷られていたのである。その絵葉書を凝視する作者の心身は、やがて高原の風につつまれるのであった。一枚の絵葉書の高原のなかに、作者は入って行くことができた。一枚の絵葉書から、作者はおのれのまわりに高原の風を呼びよせることができたのだ。六首めは手を使って祈ることのできない作者が心で十字架を切り、祈るのである。手を使って祈れぬこと、だからこそかえて作者の祈りは眞の祈りに近づくのである。七首めの作品を私は最も大切にしたい。作者の不敵な、といっていいようなたましいの一端を、のぞかせるようなみごとな作である。蚊の一匹が作者の

どこかを吸っているが、作者は蚊をおいはらうすべを知らない。作者は吸われているおのれの身体と蚊を、じっと見つめているのである。その目の澄みわたるたしかな位置と、つづく下句の母の愛を表現したこのすばらしいコントラスト。九首めと十首めは、五首めの絵はがきから風につつまれる作に似た感慨を読者にあたえるだろう。テレビは病む作者の身を大浦の天主堂へといざなうのだ。まるで作者がテレビの写す画面のなかへ入りこむように思えるのだ。そして説明の声と共に作者はスライドのなかに旅をしはじめさえるのである。床についたまゝ、作者のたましいはスライドのなかに旅立ち、あるいは天主堂を歩み、そうして高原の風を身に浴びることができるのである。このたましいの奇蹟現象は、作者の歌に対して熱情のたしかな所産であるだろう。十一首めの歌は作者を信仰にみちびいた林川幸子さんの姿をとらえている。作者の落す涙をやさしくふいて立ち上った林川さんの姿が目前に浮び上ってこよう。

作者の歌はしだいにキリストへの理解と十字架の重い影がさしこみはじめるが、なによりも作者はまた一人の女性であった。女である作者のいとしさとするせなさが私たちの胸につきささるのも、キリストと共にそうした哀切感がほとばしるからである。作者もまた床にふしつとも地上の花よめとなる倅を夢みた日もあった、血縁の男性の他に触れることもない自分の手の白さに思いをはせることもあった（十五首め、八首め）。

しかしそれら女としての情感が主たるキリストへ向いはじめる時、一個の男性としての私の胸は、どこからかやってきた見知らぬ痛みのためにあえぐのだった。かくて作者は十六首

め以来、洗礼を歌い、「打たれつ伏しつ引きおこされつ」とか、重く、はげしくせまりくる句を病床のなかから引き出してゆく。

作者の歌はこれから信仰を底に横たえつつ、もっとむずかしいものになっていく方向をめざしているようである。だが作者の生へのせつなさと、あたたかさは終生かわることはあるまい。私は聖書が、聖句が、作者の歌のなかに溶けこまばろしを見る。ひとたび溶けこんだ聖句たちが、作者の歌の背後で、その底で光さざめくさまを、私はこれからも注意深い読者の一人となって見てゆきたい。

昭和四十六年五月三十日（「鍛冶ヶ谷便り」より転載）

東京オリンピックの後行われしに

籠球にいきく運ぶ車椅子みな自らの勝者を
乗せて

さしぐめど哀れみならずテレビよりパラリン
ピックの競技明るく

目次

手足萎へて	二〇頁
あしたば	二七頁
祈る	二八頁
便り	三五頁
友	四三頁

星……………四九頁

十 字 架……………五三頁

師 の 君……………五七頁

受 洗……………六〇頁

あ と が き……………六六頁

手足萎へて

この手足癒ゆる望みを父ははと吾は捨てまじ
その日来るまで

背丈のみ大人になれどわが手足赤子の日より
未だ動かず

十姉妹の雛にさし餌をする母のついで口を開く
ひとさじ毎に

親鳥の羽の下に入る如くわが床に来て十姉妹
の眠る

初めての兄の子に会ひいとしさを現はす術な
し臥やる我が身は

師につかず学び舎もたず臥ししまま過ぎ来し
吾は歌に励みぬ

今日も床に伏しつつ麻痺の身を起し痛む唇を
もて辞書を引く

両手足小児麻痺にて萎へし身に二十七歳の春
は切なし